

財団だより

# 多摩川

2003. 6 第98号



投網籠  
青梅市郷土博物館蔵



多摩川調布取水堰（上流側より写す '03.4.6）

## ■多摩川現風景■

### (54) 川下り

多摩川リバーシップの会（任意団体：会長 長野正孝）では毎年春秋の年2回一般の参加者を集いボートによる川下りを催行している。

今春は4月6日（日）に二子玉川地先の兵庫島公園より調布取水堰下まで約5kmを下った。Eボート（グラスファイバー製10人乗り）、同ボート（空気注入ゴム製10人乗り）その他個人所有の2人乗り・1人乗りカヌー数艇で2歳の子供さんから壮年までの32名が参加した。参加者全員にライフジャケットが貸与され、10時30分開会式・会長挨拶の後、正しい溺れ方、レスキュー方法、パドルの使い方等のレクチャー受け各々ボートに乗船し出発した。途中中洲で昼食を取り、参加者の自己紹介後再び出艇し、メインイベントの調布取水堰の堰越えを迎えた。前日の雨で増水していた為堰の上下で2m位の落差があった。上流の閘門（ゲート）を開け、下流の閘門を閉め上流の水位に達した時点でボートをゲート内に移動させゲート内で待機し、今度は下流の閘門を除々に開き下流の水位に到達した時点でボートを移動し全艇無事通過することができた。その後ボートを堰下右岸に接岸し陸揚げ、後片付

けし3時頃解散した。

なお、調布取水堰は東京都水道局が管理しており閘門の開閉は事前に許可申請が必要です。

リバーシップの会については下記ホームページをご覧下さい。 <http://www.b-flag.com/river-ship/>

#### ・関連する財団の研究助成

##### <学術研究>

- ① 川崎・多摩川エコミュージアム構想をモデルとした市民・行政・企業・専門家におけるパートナーシップ型地域づくりに関する調査研究  
1999年 進士五十八 東京農業大学 (No.203)
- ② 世田谷・多摩川における市民ボランティア、学生、行政のパートナーシップ型の河川舟運振興策と癒しの川づくりのための実践的な調査研究  
2001年 長野 正孝 武蔵工業大学 (No.219)

##### <一般研究>

- ① 多摩川における水面景観の変化に関する調査研究  
1995年 島村 勇二 聖徳大学 (No.89)
- ② 環境教育、特にフィールドマナー（野外活動における倫理）の視点から捉えた多摩川の保全に関する研究  
2002年 君塚 芳輝 川の作法研究グループ (No.132)

# 多摩川散歩

## ■「八王子川環境カルタ」の作成にあたって■

八王子に清流を取り戻す市民の会会長 岡本 昭二

「八王子という地域だけで川を読み込んだカルタが作れるとは思いませんでした」市の教育長成田先生の言葉です。

八王子はカルタが作れるような川の街なのです。1級河川の源流が16もあります。その川は陣場、高尾山系、それに連なる丘陵を発して多摩川に至る経路をたどります。かつては清流でした。江戸時代、浅川で捕れた鮎をお上に献上したと古書にあります。バブル期以降、市街地が山野の緑を蚕食するにつれて、生活排水の流入をもろに受け汚れ川に変わってしまいました。上流ほどその変貌は著しく、下流より上流が汚れているという奇妙な川の姿になりました。東京都の川汚染度ワースト順位では浅川の支流が常に上位を占めることとなります。

平成9年「八王子市生活排水対策推進計画」が策定されました。20年後には鮎が泳ぎ子供たちで賑わう清流を取り戻そうというのです。そのためには行政と市民が手を取り合って川の浄化に取り組む必要があります。市民の組織「八王子に清流を取り戻す市民の会」を立ち上げたのが平成10年末でした。公募市民を含めた20人の組織です。

「生活排水を流してはいけないの」「いやいいのです。ただ流れる先の川のことを考えてやってください。」そんな啓発活動が続けるなかで、小学校の総合学習にそった出前講座が次第に増えていきました。小学生に川の大切さを説くには工夫が必要です。子供達の心にずばり焼きつけられる

文言が欲しくなりました。そこで八王子の川と大地を読み込んだカルタを作成することになったのです。文言2年、付随する絵（F6、パステル画）が2年、編集印刷製本に半年、3年がかりで簡単な冊子にまとめることができました。八王子自治研究センターの市民活動助成費が支えになりました。

1) 16の1級河川および八王子の自然環境、動植物の名を読み込む 2) 「川はふるさと」の心情を育む 3) 川の大切さの理解を深める 4) ごみのない清流を目指すなどを念頭においてまとめていきましたが、五十音に合わせて文言を調整する作業はそれほど簡単ではありません。それに推敲を重ねるほどに、なぜこの文言が成り立つのか知らせたい思いが深まってきました。一口で言い切った文言の裏には深い意味が隠されているからです。

「高尾山 緑のダムが川つくる」という文言があります。山は水を貯える貯蔵庫であってその水がすこしづつ押し出されて川が成り立つの意ですが、ここには緑と山の土や岩石が深遠なからくりがあります。「多摩川第94号」でも新藤静夫先生が「環境雑感」で触れられています。そんな深いものに気づいてくださいという願いを込めた短文をそれぞれの文言に付け加えました。

「むずかしかったでしょうか」という問いかけに、教育長から「そんなことはありません。繰り返して耳に入れることで理解していくものです。」という言葉をいただき意を強くしました。このカルタが川理解の啓発活動の道具になればと心から願っています。

連絡先 八王子市環境部環境保全課

電話 0426(20)7384

FAX 0426(26)4416

か

カジカ鳴き サワガニ遊ぶ 案内川  
南浅川の支流、高尾山口の上流。カジカガエルの声聞く会も開かれる。



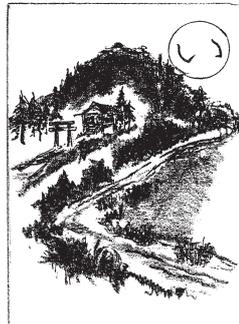
お

小津川の モリアオガエル 清き水  
浅川の支流、その清流は樹上で産卵するモリアオガエルをはぐくむ。



い

今熊の 山から始まる 川口川  
今熊山は陣馬山北東八キロ、川は川口丘陵に添うように流れる。



あ

浅川の 源流いづく 陣馬山  
源流確認は川理解の第一歩。醍醐川と案内川が合流して浅川本流（北浅川）。



▲「八王子川環境カルタ」の一部

## 私と多摩川



水源林と小河内ダム（1980.2.5筆者撮）

水源管理研究家 島 嘉壽雄

私は、東京都の水源多摩川上流の水源管理業務に約三十年余り従事した。水源管理施設は、東京都と山梨県にまたがる約2万2千ヘクタールの水道水源林、小河内ダムと有効貯水量約1億8500万立方メートルを擁する小河内貯水池及び村山山口ダムと有効貯水量約3400万立方メートルの村山山口貯水池、ならびに羽村取水堰、羽村村山山口間導水路、玉川上水の一部などであった。このほか、主としてこの水源から原水を得ていた東村山浄水場の管理にも従事した。どの施設も多くの先輩が鋭意努力して取得、築造、管理された立派な施設で、当時、その規模と技術水準の高さは、世界の水道水源管理施設に伍しても劣らないとって過言ではなかった。

多摩川上流の森林は、江戸時代から鷹狩りのため鷹の巣の保護を目的として、森林を保護した経過があった。しかし1652年玉川上水が完成して、江戸市民の水源となって、幕府はこの地帯の森林を「お留め山」に指定して禁伐としたと言われていた。しかし明治政府の初期から約30年間は乱伐が続いて、多摩川上流の荒廃は憂慮すべき状態で

あったという。

そこで東京市が、明治31年近代水道普及に着手した3年後（1901年）東京府は多摩川上流の森林の買収に着手した。これが東京水道水源管理の始まりであり2001年で100周年を迎えたことになる。

水源管理事業の最初の事業は、山梨県内に介在する風化した花崗岩の土壌からなる約4千ヘクタールの無立木地帯の植栽と、これと平行して大正時代に入って、この荒廃溪流に毎年施工してきた砂防ダムなどの小規模の堰堤工事であった。

この事業が約50年続いた1957年後にこの水源地のほぼ中央に当たる小河内（現奥多摩町原）に、当時の水道関係者の技術の粋を結集して大規模水道用ダムが完成した。換言すれば水源地帯の管理が整ったときに小河内ダムが完成したことになる。なんとよい歴史のめぐり合わせであろうか。このダムは築造後今年で46年が経過するが、従来の土砂の堆積があったとしても有効貯水量の50%の9千万立方メートルになるダムの耐用年数は、約600年の長期間となる。しかし問題がないわけではない。

私は、都庁を退職した後の約20年間、日本国内の森林やダムの状況を取材し、合せてヨーロッパ、北アメリカの森林を取材しました。そして1冊の冊子として、森林の機能・効果（第1章）ダムの長所、短所（第2章）過去の多摩川の水源地管理（第3章）日本と外国の森林事情（第4章）今後の問題点とその解決案（第5章）などとしてまとめ「森とダム、人間を潤す」（B5版320頁、出版社小学館スケヤ、定価税込み1800円）として自費出版しました。森林河川の環境問題に関する知識として十分お役に立つと自負しております。

高校生以上の方にお読みいただけるよう努力してありますので、是非一読されるようお勧めいたします。

## 環境雑感

### ■ 自然と呼吸する都市 ■

涌井 史郎

季節柄、紫陽花が美しい。それもガクアジサイやタマアジサイといった昔馴染のそれには滅多にお目にかかれない。ハイドランジャーと称される西洋アジサイのあでやかな色が目に飛び込んでくる。紫陽花といえば、この季節、この花木に最もお似合いな小動物を見かけなくなって久しい。カタツムリである。

子どもの頃には、雨、紫陽花、カタツムリというのが、いわばワンセットのように連想された。雨の中でツノを出し、ユックリとではあるが、元気に動き回るカタツムリをつかまえては、アジサイの葉と共に瓶の中に入れ、その不可思議な姿を飽きずに眺めていたものである。

多摩川に、鮎やカワセミの姿が戻って、10年は経つであろうか。世田谷の自宅庭木にウグイスやメジロの姿を普通に見るようになったし、上野毛の知人の自宅の庭に、タヌキの訪問が一匹また一匹と年々増えているとも聞く。東京に自然は戻りつつあると思える傍ら、カタツムリのように、改めて影が薄くなった存在にふと気付く。

都市生態系という言葉がある。自然がヒトの干渉を殆ど受けぬ地域の生態系、村里や里山・農地のようにヒトの干渉を受けながらも、一種の恒常性を保っている生態系に対し、ヒトやヒトを取り巻く文明の施設や装置が、本来そこに備わっていた自然に対し常に干渉し、不安定な状態に置きながらも、そこに構成された生態系を都市生態系という。

ヒトが生物的存在でありながら、その一方では経済活動に依存した生産的存在である以上、ヒトに原因して生態系を3つのカテゴリーに仕分け捉えるのは仕方ないだろう。しかし、自ら相当の距離を移動し、生息地を選択できる鳥類や、タヌキ

やニホンザル等の哺乳類動物、そして魚類は、ときとして都市を自らの生息環境として選択したり、あるいはヒットエンドランで都市に顔を出したりすることが出来る。例えばニューヨークの摩天楼を、グランドキャニオンならぬ大断崖と見做して住み着いた猛禽類の例がある。我々もまた、その様子に接して自然の回復と勘違いしやすい。

植物は、自ら動くことが出来ない。ヒトや鳥、あるいは昆虫により運ばれる以外にない。カタツムリは動けたとしても、僅かな距離でしかない。こうした存在は、一度生息の条件を奪われると、なかなか元の姿に戻ることは出来ない。そうした弱くスローな存在が、身の回りに恒常的に現れてこそ、都市が自然を取り戻したことになる。本来、我国の都市は、村里に近い、自然と呼吸し合った都市である特色をもっていた。ヒトの力で都市に自然を創成するのか、自然と呼吸しながら村里に近い都市を目指すのかが、今我々にそれが問われている。

#### 筆者プロフィール

涌井 史郎 (わくい しろう)

桐蔭横浜大学 生命環境工学研究機構長・教授

#### ■ 略 歴

1945年生まれ。

東京農業大学農学部中退、(株)石勝エクステリア代表取締役、同社取締役相談役(現在)を経て2000年より現職

#### ■ 主な団体職

(財)とうきゅう環境浄化財団選考委員、(社)日本造園学会理事・教育職能委員長、国際観光施設協会技術委員副委員長、道路緑化保全協会理事・菊地賞等創設準備委員、日本造園建設業協会理事・戦略開発検討委員長、国土交通省愛知県青少年公園緑化修景計画検討委員

#### ■ 専 門 造園学

#### ■ 主な著書

「環境開発計画としての造園」雑誌(建設資料技術)  
「カルチャーメディアムとしての緑とコミュニティのスクラップブック」雑誌(コミュニティ建設と関連産業第2巻)  
「景観創造のデザインデベロップメント」(総合ユニコム)

## 〈平成 15 年度研究助成選考結果〉

去る3月7日第45回定時選考委員会を開催し、平成15年度の研究課題の選考を行い、学術研究7件、一般研究8件が採用されました。研究課題は次の通りです。

### 〔学術研究〕

研 究 課 題	代表研究者	所 属
多摩川の水質環境の変化に対応した新たな微生物・化学物質指標の挙動と指標性評価	小堀 洋美	武蔵工業大学 環境情報学部 助教授
多摩川および東京湾から外洋域における難分解性有機汚染物質の分布と運命予測	藤原 祺多夫	東京薬科大学 生命科学部 教授
多摩川水系の貝類からみたクリプトスポリジウム汚染実態と感染防止対策に関する調査・実験研究	笹原 武志	北里大学大学院 医療系研究科 講師
多摩川水系の底質におけるポリクロロジベンゾチオフェンの分布及びその残留性の評価	中井 智司	東京農工大学 工学部 助手
多摩川水系における底生動物と水文・水理特性の影響に関する研究	土屋 十囀	前橋工科大学大学院 教授
多摩川の河川敷環境がコリドーとして山間部と市街地に孤立したアカネズミ個体群をつないでいる可能性に関する保全遺伝生態学的研究	小原 嘉明	東京農工大学 農学部 教授
テフクロクロノロジーを用いた多摩川流域における鮮新—更新世の古環境復元	田村 糸子	東京都立永山高等学校 教諭

### 〔一般研究〕

研 究 課 題	代表研究者	所 属
野川流域における「湧水保全モデル」の開発に関する計画論的研究	神谷 博	(株)設計計画水系デザイン研究室 代表取締役
南浅川流域のヒガシカワトンボ生活史にみられる気候温暖化の影響	田口 正男	神奈川県立弥栄東高等学校 教諭
森林生態系における動物の植物の種子散布過程に果たす役割に関する研究 —主に中、大型哺乳類を中心とした他の生物種との生物間相互作用について—	小池 伸介	(財)日本生態系協会 生態研究センター 研究員
多摩川流域の都市公園におけるトンボ相に関する調査	山内 唯志	戸山生物研究会 代表
多摩川二ヶ領用水から取水した水田におけるイネの生育に関する生理生態学的研究	安藤 秀俊	川崎市立中野島中学校 教諭
多摩川上流域における開発と水害	増淵 和夫	川崎市博物館振興財団 日本民家園 学芸員
二ヶ領用水取入口に関する史的考察	赤澤 寛	水道技術者
浅川産ハチオウジゾウを使った体験学習のための基礎的研究と実践	馬場 勝良	慶應義塾幼稚舎 教諭

# 財団からのお知らせ

## 第9回 とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

### 「水源林の涵養機能と水利用形態について～多摩川からの報告」

本年3月京都・滋賀・大阪を会場に第3回「世界水フォーラム」が開催され、水不足、水質汚染が地球的規模で進んでいることが報告されています。多摩川流域では東京都が水源林を管理し良質な水源を保全しています。一方多摩川の水は羽村取水堰で取水され水道水に利用されています。

当財団の助成研究には水源林の保水機構、河川の利用形態、地域住民の水環境保全活動等に関する研究が多数あります。今回はその中から三つ研究を選び研究報告並びに討論を通して新たな環境回復の指針を探りたいと思います。

### プログラム

13:00	開会挨拶	とうきゅう環境浄化財団 理事長	五島 哲
13:05	報告1	「水源林地帯を主体とした多摩川流域の解析評価と環境管理に関する調査・研究」 1997年～1999年助成 (財)日本自然保護協会 理事長 千葉大学 名誉教授	田畑 貞寿
13:35	報告2	「多摩川の流況調整に関する研究－羽村堰越流量と水利用形態の変更を中心にした流況調整－」 1999年～2000年助成 東京農業大学 非常勤講師	岩屋 隆夫
14:05	報告3	「『水みちマップ』をつくるための調査研究と井戸にみる多摩市の昔の暮らし」 2000年～2001年助成 生活者の会 代表	森岡 淳子
14:35	休憩 (15分)		
14:50	総合討論会	コーディネーター とうきゅう環境浄化財団 常務理事 コメンテーター 東京農工大学 名誉教授	長井 弘道 小倉 紀雄
16:00	閉会		

日時／平成15年7月29日(火)  
13:00～16:00

場所／国連大学 5階  
Conference Hall

定員／100名

参加費／無料

主催／財団法人  
とうきゅう環境浄化財団

※駐車場はございませんので、  
車での御来場はご遠慮下さい。



### 申込方法／

往復ハガキに住所・氏名（勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名）  
各々の電話番号を明記し事務局までご送付下さい。FAXでも可（要返信FAX番号）

### 申込み切／

お申込みは先着順で定員になり次第、  
×切ります。（定員以内の場合は、7月15日  
×切り）

### お申込み・お問い合わせ／

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-16-14  
（渋谷地下鉄ビル内）  
**(財)とうきゅう環境浄化財団**  
☎(03)3400-9142 ☎(03)3400-9141

- ・発行日 平成15年6月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14  
（渋谷地下鉄ビル内）

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>

\*印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

